

末黒野

すぐろの

2月号 (通巻870号)



冬の月

無花果の語り掛くるよ皿の上
香と影と畑に落とせり榎櫃の実
丘の道秋思の影の逃げ易き
冬蝶の翅の白さを諾へり
手を回し冬樹のいのち抱へけり
潮の音を香を昂らせ枯木星
櫟枯れ校庭風の走るのみ
杣山を重く出でたり冬の月

松本三千夫

(名譽主宰)

冬紅葉

冬に入る巖越す時の水の艶
一舟もなく安らけし鴨の沼
茅葺きの寺門彩どり冬紅葉
禅林の遅速織りなす冬紅葉
足裏よりひろごる記憶落葉径
知恵伊豆の墓に供華なし冬の鴟
湧水に鯉の群れをり冬ぬくき
いと小さき業平塚や木の葉散る
無人駅は雀の宿や冬うらら
ト口箱の大鋸屑うごくずわい蟹
鴨南蛮すすり勤労感謝の日
戻るや海のやうなる大枯野

黒滝志麻子

(全 宰)

貼り絵

熔岩の上に立つ老松の色変へず
かはたれの水琴窟や露の宿
戸惑へる肌感覚今朝の冬
門の軒支ふる羅漢散紅葉
海鼠壁の堂の饅塚木守柿
隠沼の貼り絵となりぬ散紅葉
ここよりは思索の小道花八手
池の面の綺羅をまとへり枯蓮
笹鳴や夕日とどむる磨崖仏
熊手市周囲巻き込む手締めかな
ひとりごつ母の涙や日向ぼこ
それとなく省略増やし年の暮

森

清

(副主筆)

堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

秋惜しむ

石黒興平

騎馬戦に勝つて泣く子や天高き
踊る字の梨完売と農家前
高稲架の裾ひんやりと暮れ初めて
捨てかぬるものに埋もるる秋思かな
ハロウィンや花舗の南瓜と目の合うて
ルーペ手に文字膨らまず文化の日
戻り来てまた大輪の菊の前
栞紐切れたるままの秋思かな
足踏みのシテの振舞秋惜しむ
おいそれと変はれぬ暮し冬に入る

秋の海

岡野里子

秋天へ伸ぶる石段山気満つ
阿羅漢や杉の木立の空澄みてし
風まとひ光のうねり芒原
ハロウィンの狸出たり芒原
潮の目やひかりとなりて鳥渡る
秋澄むや富士湧水の溶岩の池
天つ風裾引く富士へ秋の海
富士を染め海原を染め秋落暉
秋天や富士全容の揺るぎなく
落日のわたつみの秋惜しみけり



波郷忌

田中臥石

木犀の日暮れて匂ふ羽生宿
冬日射す羽生木綿の糸車
波郷忌を修す夕べの花八手
風鶴忌写真の波郷微笑みてをり
仁右衛門の島へ小春の櫓の軋み
海桐の実拾ふ海鳴る蓬島
鏡忍寺へ誦経の一步冬の影
冬日射し波の伊八の欄間透く
冬風の真砂女の家や安房岬
潮零れ落つ岩牡蠣の網袋

行く秋

森清信子

秋澄むや森の奥より沢の音
太郎杉次郎杉の秀秋気満つ
高原の木造駅舎秋あかね
水澄むや揺るる草影雲の影
魔除けめき軒にてらてら唐辛子
秋雲の自在に千切れ相模湾
一人居の耳聴き夕秋深み
行く秋や暮色引きつつ発てる鳥
昼月を上げてざはめき枯芒
かくれんぼめく五百羅漢や散紅葉

小六月

安齋久英

中天に雲の切れ端暮の秋
心地よき音の水車や小六月
江ノ電の車窓とろりと小春風
時雨るるや昔を今になまこ壁
山門の蒼古仰ぐや時雨傘
しぐるるや肩寄せ合へる島の墓
波引きて次の波待ち冬に入る
天空を計り余せり冬の鳶
たゆたふて波を櫂や浮寝鳥
枯野道日矢ひとすぢに心置き



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



杜鵑草 堺 昌子

登るほど風やはらかし杜鵑草
谿川を染めていろ濃き野菊かな
秋深む別れを言へぬ友逝きぬ
朝日かげ高くは飛ばぬ秋の蝶
灯台へ坂七曲り赤のまま
冬芒波のままなる漁舟
色艶にこだはり摘みぬみかん狩り

豆 稲 架 齊藤マキ子

桜紅葉 高木邦雄

豆稲架に音なく雨のきてをりぬ
ゆく秋や星を誘へる山家の灯
ちよつとした縁のありて新走
暮の秋醬の匂ふ黄金町
暮早し外着のままの厨ごと
冬さうび墓所に小さき星条旗
国東の奇岩の秘仏初しぐれ

没日透く桜紅葉の梢の綺羅
風なくも落葉時雨の降り止まず
夕照や雁渡り行く伊豆の海
人を呑みうねり激しき芒原
あづみ野や満天占むる冬の星
晩鐘の余韻の空や冬の星
林檎剥く卓に広がる津軽の香

芒

今村千年

尾花揺れ金時山も揺るるかな
芒原いつもどこかの揺れてをり
ほほ笑めば五百羅漢も紅葉晴
連綿と富士の湧き水豊の秋
そぞろ寒富士の溶岩そここに
栗を剥く妻の鼻歌おほどかに
選外のことには薫れり菊花展

芒原 及川照子

秋澄むや伊豆は鼻先突き出して
うたかたの余生や風の芒原
秋風を額に背に石仏
烏瓜人待ち顔の夕べかな
意を込めて判官びいきの菊師かな
朴落葉一枚ごとの音たてて
一枚の茶受けの皿に柿落葉

山茶花

岡田史女

生国の土の香灰ととろろ汁
夕照の色をとどめて禅寺丸
雀色時芒は光たたたへけり
丹沢のかぶさる村や芋の露
初時雨史跡を語る石垣に
山茶花や夕の湿りの石畳
山茶花の散りこぼるるや時頼忌

九十九折 小田嶋野笛

初雪の富士大観の絵のごとし
木漏れ日の紅葉かつ散る九十九折
珈琲の香の深めたる秋思かな
勝菊の黄のかがやきや鳥の声
黙すべし銀杏ひた散る道なれば
秋懐や己が齢に驚きて
身に入むや出窓の玻璃を磨き上げ

青炎集

黒滝志麻子選



横浜 梅田 武

横浜 和田 慈子

改札の菊のひと鉢無人駅
赤門へ辿る坂道こぼれ萩

奥宮を仰ぐ一步や霧晴れて
秋没日湖の輝く一とこ

草の実を付けて日暮れて叱られて
秋天や腕白凜と騎馬の将

銀杏にかがむ嫗の丸き背

竹叢に絡む一灯からすうり

港への人出果てたる後の月

竹春てふ此れ見よがしの日和かな

夫に歩を合はせて仰ぐ十三夜
変身の黒きコートや夜のオペラ

三郷 中谷 未知

大 網 白 里

百歳を寿ぐ集ひ菊日和
優先席譲られ惑ふ初時雨

平泳ぎの形に乾きて鵲の贅

高層や音無く煙る小夜時雨

六地藏の伏目遠目や鴈日和

寒晴れの喜寿賑賑しクラス会

宇治橋の鳥居に傾ぐ初紅葉

冬帽子目まで被りておんぶの子

子の墓は木の実びつしり日を弾き

湯豆腐掬ふ器用談義の夕餉かな

水澄むや伊勢に購ふ朱印帳

能舞台開け放ちたる野分あと

岡 井 マ ス ミ

散り急ぐ桜紅葉や杣の道

青空を大きく開けぬ松手入れ

池の面の細波秋の日を返す

色付きて藪にともりぬ烏瓜

栗飯や程良き妻の塩加減

こほろぎや朝の駅への道すから

横 浜 柚 木 澄

臥すばかりの園の動物秋暑し

十三夜の晩の一品肉団子

星月夜星座見分くる午後八時

褐色の風船葛果つるのみ

大向うの掛け声もあり村芝居

酉の市御祝儀渡す粋な人

横 浜 飯 田 久 美 子

神有月最新抗癌剤注射

ファゴットの音昇華して鱗雲

稲の香やバンダナ解く少女より

推敲の吾を急かせてつづれさせ

微笑みの幼き遺影うそ寒し

黄昏の湖面に染まり秋の蝶

横 浜 是 松 三 雄

ころころと酔橘宇宙の香りかな

読み止しの嵩の増へゆく秋思かな

ファイナルの舞を一差し黄落す

俎板のへこみの目立つ暮の秋

羅漢にも美男おはする小春かな

寺社巡りの終に出会ひぬ冬桜

目 黒 五十嵐貴子

橋渡る菊の香りの濃き方へ

丹精のひととせ語る菊師かな

近くにも遠目にも見て菊花展

先陣の鴨の嘴より日のしづく

枯はちす風の湿りをまとひけり

菊日和脇木陣の腕木門

横 浜 佐 藤 喬 風

庭先のはげの大樹や冬紅葉

侘助の花ひつそりと庭の垣

山茶花の散り初むる庭踏み行きぬ

日溜りの獣の径や石路の花

東の谷戸の家壁冬日映ゆ

冬菊のやうやく咲きて夕日浴び

耕 土 集

森清 堯選



菊の香や息深くせる待ち合はせ

横浜 中里 昌江

グリーンと二歳児答ふマスカット

スマホより弾ける音色木の実降る
銀杏黄葉そのみ淡き夜道かな

横浜 岩崎 藍

引越しや平成終の冬隣

鶏頭や昏れ落ちてなほ庭焦かし
ダンディーの渋きメガネやそぞろ寒

かねたたき工事現場の棚の上

さざん花や安否氣遣ふ垣根越し

秋蝶の縫ひてテントは花のやう

古書街の回廊巡り秋の風

川崎 木村 純子

ちびつ子のよさこい踊り鯛雲

秋高しかくも青さの眼にしみて
鱈一尾のホップステップジャンプかな

横浜 滝口 洋子

ト口箱の秋刀魚顔もて選ひけり

冷まじや昼の温もり捻ぢ伏せて

友からの重き話や初炬燵

立冬や軽き上衣の散歩道

しはぶくや今朝空調の試運転

散ることの一途や木の葉音もなく

栗飯の匂ふ夕餉や恙無き

横浜 松橋 輝子

手作りの篠競ふ児ら秋つらら

碧空や息のむ峰の照紅葉
ふるさとの雲流れ来ぬ秋茜

横浜 伊藤 鴉

秋夕焼灘に迸る日のかげら

柿喰ふや子規の句捜す電子辞書

点在の廢墟被へり村紅葉

見返りの湖底の村や夕紅葉

巖島鳥居に確と牡蠣の殻

高原に旅愁を深め山紅葉

貝割菜

小川 玉泉

(名誉顧問)

味噌汁の具にと賜はる貝割菜
懐かしや塩加減良きむかご飯
池に映え満天星紅葉真つ盛り
秋行くといふに咲きをり姫林檎
森閑と一間廊下ふとん干す
門脇の日差しをとらへ冬の蟻

雑記帳 19

今年の夏は、異常気象であつた。ペットボト
ルの水に助けられて、無事に乗り越えられたと
感謝・感謝である。暑さに耐えた庭の木木の中
にも花時を違えたものも見られた。